

図書紹介

Bohmu Bashin. *Pagan Hminzazu Thudethana Longan*. Myanma Naingan Thamain Kawmashin. Rangoon: 1964. x+143 p. [バシン少佐編: パガンの墨文調査報告。ビルマ革命政府文化省ビルマ史委員会] (ビルマ文)

ビルマ史および古代ビルマ語の研究者にとって最も利用価値の高い資料は、約3千にのぼる石碑 (Steinschrift) であるが、その補助資料ともいべきものに、素焼の土板 (Votive Tablet) と仏塔や僧院の壁に書かれた墨文 (Ink Inscription) とがある。

石碑については、かつて600余の facsimiles を収録した *Inscriptions of Burma* (1933-56) が公刊されており、また Pe Maung Tin & G.H. Luce による現代ビルマ文字への転写文(1928年)や、E Maung による転写文(1958年)等があった。また、土板についても既に U. Mya による写真版(1961年)が公にされている。しかし、墨文に関するまとまった調査報告書は従来なかった。おそらく本書がはじめてであろう。

石碑や土板が、石または粘土を材料としてそれに文字を「彫り込んでいる」のに対し、墨文は、仏塔や僧院内部の壁画の下に墨で文字を「書いた」ものである。時代的には、仏塔、僧院の建立当時に書かれたものと、後世それらを修理した際に書かれた墨文の二種に分かれる。内容は、個人の生年月日を占星図に配置した形式のものが圧倒的に多いが、散文、韻文形式による功德の記念銘文や偈頌等もみられる。

本書は、1955年に設置されたビルマ史委員会 (Burma Historical Commission) が中心となって、1962年2月から翌年3月までの間に行なった古都パガンの墨文調査報告である。全体の構成は、第1次から第3次までの調査活動 (第1次1962年2~3月、第2次同年10月、第3次同年12月~1963年3月) をまとめた本文と、(1)墨文、(2)建築様式、(3)壁画の3部に分かれた Appendix、並びに、墨文18枚、壁画15枚の写真および地図とから成り立っている。

墨文は、単にビルマ語史の研究資料としてだけではなく、パガン時代、インワ時代におけるビルマ人の生

活状態、社会、経済、美術、仏教等の一端をうかがい知るための重要な史的資料でもある。革命政府が絶えず力を入れてきた民族文化遺産の保存と調査研究の成果がまた一つまとまったといえよう。ビルマにおける学問的水準の高さを示す例という意味からも、本書の一読をおすすめしたい。(大野 徹)

Eugénie J.A. Henderson. *Tiddim Chin, A Descriptive Analysis of Two Texts*. London: Oxford University Press, 1965. ix+172 p.

本書は、東洋アフリカ学院 (ロンドン大学) で音声学の教授をしている著者が、1954年の秋、Theodore Stern, G.H. Luce 等と共に、4週間にわたって行なったチン丘陵のクキ・チン諸語調査の研究成果の一端である。

インドとビルマの国境に沿って南北にのびるチン丘陵地帯 (行政的呼称はチン特別区) で、クキ・チン語とよばれる数多くの方言から成り立つ言語が話されている事は、かなり古くから知られていた。G.A. Grierson 以降使用されている分類法 (北部チン、中部チン、南部チン、古クキの4方言群) を踏襲すれば、本書の分析対象であるティディム方言は、「北部方言」に属する。古くは Kamhau と、Sokte とよばれたが、今日では一般に Tiddim と称されている。

著者は、ティディム方言による二つの物語を材料として、Narrative Style と Colloquial Style の分析を本書で行なった。前者はいわゆる「文語体」であり、後者は「口語体」を意味する。この二大文体に基づき、著者はティディム方言の構成要素として、音韻、声調、音節、文、句、Figure (語と接辞の連結形)、語、接辞等を明らかにしている。但し、文、句には、書かれぬ要素として Intonation が含まれる。

ティディム方言の言語構造がきわめて精密に分析記述されている点、確かに本書は、典型的な Descriptive Analysis の本である。けれども、ティディム方言の文法構造すべてが、本書の中に網羅されているわけではない。そしてその原因が、材料の乏しさによるものである事も否定できない。資料として用いられた二種の物語の一つ Dahpa Thu は、ティディム・チン族の間では広く知られた伝説であり、拙稿「共通クキ・チン語の再構成」(『言語研究』No. 47, p. 9)

において紹介したティディム方言の読本 *Lai Sinna Lai Bu, Tan III* の中にも掲載されているが、著者はこの本にも目を通しておられないようである。

ティディム方言が他のクキ・チン諸方言との間にもどのような関係をもっているかという事は、勿論本書の目的ではないにしても、残念ながら明らかにされていない。この書が出版される前に、著者から直接手紙で一読をすすめられた私は、本書が、単に記述研究の段階にのみとどまっているのではなく、クキ・チン語全体の総合的研究を展望できるようなものであってほしいと望んでいた。しかし、音声学を専攻とする著者に対しては無理な期待だったのであろう、結果は記述研究の域を一步も出てはいなかった。

とはいうものの、クキ・チン語の研究者がきわめて少ない今日、本書のような基礎的研究書の出現は、やはり貴重なものといわざるを得ない。この言語の比較研究、史的研究に先立つ基礎的な文献としてすいせんする気持ちに変わりはない。(大野 徹)

U Aung Thaw. *Beikthano Myohaung*. Tekkado Pinnya Padetha Sazaung. Shehaung Thutethana Thana. Rangoon: 1966. xviii+49 p. [ウー・アウントー編：ビシュヌ城跡。大学学術紀要。考古学局]

ビルマは、その中立(鎖国)政策によって外国人の入国を著しく困難ならしめていると同時に、ビルマ国内の学問的現状を世界に公表する事に対しても、かたく門戸を閉じてしまったように見える。ビルマに関心をもちその研究に従事している者にとって、今のような状態は、誠に遺憾であると思わざるを得ない。

さて本書は、当センターの石井米雄助教授が、1966年11月ビルマを訪れた際入手し、持ち帰られた文献の内の1冊である。題名にもあるように、本書はビシュヌ(ビルマ語名ベイタノウ)町遺跡の発掘調査の報告である。ベイタノウは、マグウェー県タウンドウィンダー郡コウコウグッ村の北部にある。プローム南東5マイルの地にあるシュリクシェットラ(ビルマ名タイエーキッターヤ、玄奘の室利差咀羅、義浄の室利察咀羅)およびシュエーボウ県内にあるハリンダーと並んで、ピュー族の三大遺跡の一つに数えられる。

ピュー族は、11世紀以降栄えたビルマ族のパガン王

朝に先立って、ビルマの地に独自の文化をうちたてた民族であるが、10世紀以後いかなる理由によるのか地上から姿を消してしまった。漢籍史料(蛮書)には、南詔に攻撃され捕虜3千人が連れ去られた旨記されているが、ピュー族消滅の理由がそれだけによるとは考えられない。北から南進してきたビルマ族に混血吸収されたのであろうともいわれている(Than Tun)が、その経緯は、やはりビルマ史上最大の謎といってもさしつかえないであろう。

ベイタノウの発掘調査は、1958年から63年にかけて計6回行なわれた。本書の編者ウー・アウントーは考古学局の広報部長であるが、第1次・第2次発掘調査の際の団長でもある。

ベイタノウ城跡は、ほぼ角形をしており(この点、円形のタイエーキッターヤよりは角形のハリンダーに近い)、一辺約2マイルの城壁が、その内部の遺跡と思われる幾つかの小高い丘をとりかこんでいる。

発掘はベイタノウ城跡の全域にわたって行なわれたのではなく、予算の関係で特に重要と思われる25箇所が選ばれ調査された。本書には、その25箇所の各々に関する調査報告があるが、記述順序は、城壁、城門、人家、宗教的儀場、その他というように分類されている。

城壁はすべてレンガ作りで、ほぼ四角な形をしている。ビルマの他の王都のように濠があったかどうかはわからない。城壁の一面には門が3門ずつあったと思われるが、現実には確認されていない。門は木製で、鉄の錠が用いられていたようである。人家には大小数室の間取りがあり、構造は、壁がレンガ、他は木造だったらしく、焼け残った木材があちこちから発見されている。宗教的儀礼に関する建物と思われる場所も見つかっているが、それが仏教的なものなのか、バラモン的なものなのかは明らかでない。

最も精細に富んだ記述は、「その他」の章にみられる。この章は、煉瓦、土器、珠数、土像、石器、金属製品、漆喰製品、人骨、獣骨等の項に細分されており、ベイタノウ住民の生活状態をうかがい知る事のできる資料に富んでいる。

特に重要なのは、7個の骨壺が出土している事である。骨壺は、ピュー族文化を示す一つの特徴だといってもよい。ピュー族には、茶毘にふした骨や灰を、石または土製の壺におさめて埋葬する習慣があり、この習俗は、その後ビルマ国内のいかなる民族にも伝承さ